

精神分析的心理療法における夢の利用

名 島 潤 慈

The Use of Dreams in Psychoanalytic Psychotherapy

Junji NAJIMA

(Received September 4, 1995)

It is well known that Sigmund Freud referred to dreams as “the royal road to the unconscious.” Since Freud’s seminal work, *Die Traumdeutung (The Interpretation of Dreams)*, was published in 1900, interest in dream psychology has grown and many studies have been done. The purpose of this paper is thoroughly practical: to make available to psychotherapists the concepts I have found useful during many years spent in the clinical study of dreams. The issues taken up in the paper are as follows: (1) significance of dreams in the human life, (2) significance of dreams in psychotherapy, (3) function of dreams, (4) dream-inducing factors, (5) some notes on the use of dreams, (6) getting information from clients, (7) some notes on the meaning of dreams, (8) explanation of the meaning of dreams to clients, (9) therapist-client relationship and dreams, (10) dreams as indicators of countertransference, (11) therapeutic process and dreams, (12) applicability of dream analysis, (13) meaning of various types of dreams. In the paper, I discuss details of these issues and attempt to show the therapeutic value of utilizing dreams as fully as possible in the analytic setting.

Key words: dream, dream analysis, psychoanalytic psychotherapy

I 本稿のねらい

夢は、奈良時代までは「いめ (imë)」と呼ばれ、平安時代以降は「ゆめ (yume)」と呼ばれた。「いめ」は通説では「寢目 (寐目)」, すなわち寝ねたる目に映るものであるが, 国語学的・心理学的にみた場合, 「神のさとしを見るための, 覚醒時の雑念を持たない齋目」(木村, 1978)であり, 一方「ゆめ」は, 「ケガレを祓って清めた齋目」(名島, 1994, 1995a)であろう(齋はイともユとも読まれる)。清らかに澄んだ目に映じるもの—これが古代の夢であり, そこには, 悪夢や凶夢を回避したいという願望が窺える。これは, 現代においても当てはまることであろう。

ところで, 筆者は心理臨床の世界に入って25年になる。治療形態は, クライエントが子どもの場合には力動的プレイセラピー, 思春期以上は対面形式による精神分析的な心理療法が多い。場合によれば, クライエントの能動性 (activeness) を回復するために, 「人生の階段昇り (Walking Up the Stairs of Life)」と称している自我支持的な心理・身体感覚的イメージ技法を用いることもある。

これらのうち, 精神分析的な心理療法では言葉による対話が主になるが, 夢を聞かせてもらって夢分析を行うことも多い。これまで正確に数えたことはないが, 多くの夢の資料が筆者の手元にある。筆者個人としては, 日常の出来事やコンプレックス, 対人関係, 過去の心的外傷体験の記憶などをただ単に言葉だけで吟味するよりも, 夢を媒介として面接を進める方がはるかに実り豊

かであるように感じている。

夢に関する研究論文は数多い。日本の場合だけをとってみても、明治以後現代まで600以上のものがある(名島, 1993a)。諸外国のものも含めれば膨大になるが、本稿では、できるだけ筆者自身の経験を主軸にして、臨床場面における夢の治療的利用について考察したい。なお、本稿で用いるさまざまなクライアントの夢は、D1, D2といった具合に通し番号を打った。DはDreamの略である。筆者以外の研究者・臨床家が聴取した夢を引用する場合にはそのつどそのことを明記した。

II 人間の生における夢の意義

人が1日のうち8時間眠るとすれば、1日の3分の1は眠りの中である。したがって、ある人が仮に90歳まで生きたとすれば、30年間は眠りの中である。眠りの中では意識がないので、30年間は(意識より見れば)生きなかったことになる。ただし、眠りの中で唯一、われわれが生きている瞬間がある。それが夢の世界である。少し極端な言い方をすれば、夢を見てもそれらをすべて忘却するとすれば、その人は90年のうち60年間しか生きなかったことになるが、夢の世界と非夢の世界の両方を生きれば、その人は文字通り90年の人生を送ったことになる。夢の持つ豊かな意味を汲み取って非夢の世界を充実させること—これが人の生における夢の位置ではないかと思える。

ところで、「夢と現実」という言葉があるが、この対比は正確に言えば、「夢の現実」と「非夢の現実」(「目覚めの現実」)ではないだろうか。「夢の中の人生」は、「目覚めている時の人生」に比べて、優るとも劣らない価値を有している。日本には平安時代から「夢の浮橋(a floating bridge in the dream)」という言葉があるが、この比喩を借りれば、浮橋、つまり、水の上に浮いた、頼りなくて危うい橋をきちんとした橋に替え、夢の中だけの橋を、「夢の世界」と「目覚めの世界」との間の架橋へと変換するのが大切であるように思える。このような変換によって二つの世界は連結し、二つの世界が相互に活性化しあうようになる。つまり、夢の世界の豊かさが目覚めの世界を豊かにし、逆に、目覚めの世界の豊かさが夢の世界を豊かにするようになる訳である。

パーソナリティの統合という観点から見た場合、夢の世界の自分(dream self)と目覚めの世界の自分(waking self)とを統合することが大切となろう。治療的な観点よりすれば、夢の自分と目覚めの自分というクライアントの自我分裂をいやし、自我の統合をはかることが治療者の仕事となろう。

III 心理療法における夢の意義

心理療法における夢の意義としては、以下のようなことが挙げられよう。

まず第1は、夢はクライアントに対する共感性を高める手段となるということである。例えば、ある男子大学生は教師を希望する父親の期待を容れて教員養成系の教育学部に入学したものの、自分自身では作家への望みを捨て切れず、この内的引き裂かれの中で1年間留年した後、大学3年目の終わりの3月末に筆者の許に相談を受けにやってきた(名島, 1989)。話を聞いてみると、彼は教師になるつもりはなく、4月から文学の通信講座を受講することにしていくという。これは、

父親の期待を裏切らないように在学しつつ自分の願望を満たすという折衷策なのであるが、しかし、これによって葛藤が解決される訳ではない。彼は筆者に対して寡黙がちで、時折「きつき」を訴えた。ただ、筆者には、彼の言う「きつき」が頭では分かるが、もう一つピンとこなかった。そこで筆者は彼に、「最近見た夢で何か印象に残っているものがありますか」と聞いてみた。すると彼は、「自分が脱け殻になって部屋の中に横向きに寝ている。なぜか死んでいると分かった。死んだ自分を見ている意識がある。テレパシーじゃないけど、空気の中に自分の神経が全部散らばっているみたい。地球上のどこでも、何が起きているか知りたければ分かる。自分以外にもそういう精神体がいるのかと考えたらいっぱいいる。死人が増えれば増えるほど、そういうふうに宇宙が膨張してくる」(D1)と答えた。これを聞いた筆者には、「きつき」という言葉だけではよく分からなかったクライアントの苦衷が、「身体(死体)と心(精神体)が分裂し、心は他者とのコミュニケーションを求めている(テレパシーと数多くの精神体)」という視覚的イメージによってよく理解できたのである。また、別の男子大学生は筆者に対して「つらい」という言葉を連発したが、筆者にはよく分からず、そこで夢を聞いてみると、「蟻地獄にはまって、もがけばもがくほど身体が砂の中に埋もれていく」という夢(D2)を報告してくれたので、筆者には初めて、彼の生きている「つらい」世界が理解できたというエピソードもある。

このように、夢は、クライアントの心的状況に対する共感(empathy)、つまり Fliess (1942) の言う一時的・試行的同一化(transient trial identification)を高めてくれることが多い。

第2は、夢というものが実に豊かな情報を含み持っていることである。治療者は夢(夢そのものと夢の構成要素についてのクライアントの連想)を利用することによってさまざまな情報を手にいれることができる。具体的に言えば、(1)クライアントの心理・性的・社会的発達水準、(2)パーソナリティ構造、(3)対人関係、(4)自我同一性の様態、(5)現在直面している心理・社会的危機、(6)治療の進展度や効果、(7)治療者－クライアント関係などである。これらはもちろん、一つの夢の中に重なりあっていることも多い。

ここで、夢の情報ということで1例を挙げれば、ある神経症的登校拒否の男性クライアント(高校1年生)はインタビュー面接の段階で、最近見た夢として、「戦場で鉄砲を撃つが敵にあたらず、最後は撃たれて死んでしまう夢」(D3)を報告した(名島, 1982a, 1989)。この夢の各構成要素についてのクライアントの連想や、治療者との話し合いの中で明らかになったのは、(1)男性同一性の未形成(男性的活力の社会的象徴である鉄砲が有効に機能しない＝敵にあたらない)、(2)主体性の喪失(はっきりした目的意識もなくただ命令のままに動いて仕方なく戦う)、(3)母親からの分離と独立をめぐる葛藤(弾の飛び交う戦場)と、この葛藤による活力の極度の低下(戦死)であった。

第3は、言葉によるクライアントとの交流が非常にむづかしい時、夢がコミュニケーションの通路になる可能性を有することである。例えば、筆者はある時、分裂病質人格障害(schizoid personality disorder)と思える男性のクライアント(20歳、無職)に心理療法を行った(名島, 1993c)。この人は最初親に連れて来られたこともあって沈黙が多く、筆者が質問するとポツリポツリ答えるが、それも外的な出来事(高校時代の部活など)についてだけで、質問が彼自身の考えや感情のことになると途端に口を閉ざしてしまう。50分間の面接時間の中で彼が話す言葉の総量は、1行にも満たないほどである。しかし、面接には休まずに1人で通ってくる。そこで筆者は、面接4回目に、「過去において印象に残る夢」と「この世に生まれてから初めて見た夢」を尋ねてみた。すると彼は、印象夢として、高校時代の「何か人間ではないものに追いかけられ、両手をばたつかせて空を飛んで逃げる夢」(D4)、人生最早期の夢として、6歳の時の「真っ暗な部屋で

寝ていると隅で何か赤いものが光っていて、怖くて声を挙げられなかった夢」(D5)を報告した。夢の各構成要素についての連想は極めて貧弱なものであったが、それはともかく、4回目以後の面接は夢を中心に進められ、夢についての話し合いの中で時折、仮面のような無表情さが崩れ、柔和な顔つきになることがあった。彼の心の中にある何か得体の知れない恐怖心と迫害不安(D4・D5)が他者との言語的コミュニケーションを阻んでおり、このケースの場合、夢なしでは彼のパーソナリティの問題点に接近することは困難であった。

第4は、夢においてクライアントの過去が再現されやすいということである。過去の再現はもちろん、寝椅子による自由連想でも可能であるが、週4回から5回のペースで自由連想を行えるクライアントは極めて少なく、ほとんどは週1,2回の対面形式による面接である。対面形式の場合にはどうしても対話が多くなるので、自由連想のように生々しい感情を伴った記憶が想起されることはめったにない。したがって、対面形式による精神分析的な心理療法が大勢を占める現在においては、それだけ夢の持つ重要性が増してこよう。

第5は、夢は治療中はもちろんのこと、治療終了後もクライアントにとって自己吟味の有益な手段となることである。俗に「人間ジャングル」とも呼ばれるこの厄介な対人世界を生き抜いていくためには慎重な自己チェックが必要であるが、夢はこのようなチェックに大変有効である。このように夢が役立つのは、クライアント自身が面接を受けている間に夢の活用の仕方を学習したところによるところが大きい。

IV 夢の機能

前章の最後で夢の活用ということについて述べたが、筆者自身も日頃、夢を活用している。それほど多くは見ないが、見る夢は印象的なものばかりである。夢は、Freud(1900)にとっては「ある(抑圧され、排斥された)願望の(偽装した)充足」であり、Adlerにとっては「問題解決の試み」(1925)、「人生のスタイル(style of life)の支持と強化」(1932)であり、Jungにとっては「無意識の象徴的な表現」(1948)、「意識の態度に対する補償」(1963)、「平衡を回復しようとする心的組織の試み」(1968)であり、Eriksonにとっては「葛藤から自由な状態を取り戻す試み」(1954)、「個人の同一性の持続的維持に対する脅威の表現」(1964)である。ここには、願望充足、問題解決、平衡の回復、同一性葛藤の解消といった夢の機能的側面に関する説が提唱されている。

筆者自身にとっては、夢とはイメージによる自己伝達(self-communication)であり、夢の機能は、結合(connecting)と啓示(revelation)である。結合は文字通り、過去と現在、内と外、表の自分と裏の自分とを相互に結び合わせるものである。啓示は、Fromm(1951)の言う洞察(insight)に類似しているが、それよりももう少し能動的な要素を有している。つまり、心理・社会的危機や治療的危機にさいして筆者が対処すべき指針といったものを含んでいる。啓示の主は、かつてのスーパーバイザーや個人分析家(教育分析家)の姿をとったものが多いが、稀にはかつてのクライアントもいる。ちなみに、筆者は夢に対する夢主の構えという観点から、夢を能動夢(active dream)と受動夢(passive dream)に分けている(名島, 1995bc)。能動夢は、例えば宗教者の親鸞や法然が見た一連の夢のように(名島, 1992, 1993b, 1995e, 1996)、夢主が夢から積極的に何か重要なことを取り出そうとする場合に見る夢であり、長く記憶されることが多い。一方、受動夢は普通の人々が普通に見る夢で、不安夢(anxiety dream)や外傷夢(traumatic dream)以外はす

みやかに忘れ去られてしまう。臨床場面で言えば、クライアントが治療者の援助なしに夢を活用できるようになれば、これは能動夢と言ってもよい。能動夢は、夢主の能動性 (activeness) と対応する。つまり、困難を回避しないで困難に直面していくという能動性が回復されてくると、夢の方も能動夢となってくる。

V 夢の誘因

過去において実際に体験した戦闘、大火災、地震、強姦などの場面が何度も出現するような外傷夢の場合や、普段から強い恐怖感を抱いている神経症者が見る恐怖夢 (fear dream) などは別として、夢をひきおこす誘因は、(1) 前日 (ないし数日前) の出来事、(2) 眠る前に考えていたこと (気にかかっていたこと)、(3) 夢を見ている時の外的刺激、(4) 夢を見ている時の内的刺激の四つである。

(1) は、前日に町で久し振りに B さんと会い、その夜の夢に B さんが出てきたり、テレビで地震特集の番組をやったのを見て、3 日後の夢の中に、小学校時代に実際に体験した地震の場面が出てくるといった場合である。

(2) は、明日人前で話さなければならないことを気に病みながら眠りに入り、明け方、人前で大恥をかいている夢を見て飛び起きるといったような場合である。

(3) は、寝ている時に発生した雷の音によって爆弾が破裂する夢を見たり、寝ていてベッドから落ちた瞬間に落下の夢を見たりする場合である。外的刺激はもちろん誘因であって、それによってひきおこされる夢の内容は人によって異なる。ちなみに、簗輪 (1994) は、REM 睡眠下の被験者 (大学生) に感覚刺激を与えた後、被験者を覚醒させて、見た夢を聴取するという実験を行った。その結果、光刺激 (懐中電灯の点滅) を与えると被験者の A は「小さい黄色っぽい花火が黒色の空に現れたり消えたりする夢」、霧吹きで冷水を吹きかけると、A は「冷たい雨に濡れながら立っている夢」、B は「津波に襲われる夢」「雪が降っている団地を自転車に乗って、年賀状を配達している夢」が出現するといった結果が得られている。

われわれが日常見る夢には過去から現在までの諸経験、内的な思考・欲望・コンプレックス、日常の対人関係などが相互にかつ複雑に関与するので、ここに取り上げた「実験夢」を普通の夢と同一視する訳にはいかないが、それはともかく、この簗輪の実験は夢の形成を考える上で大変興味深い結果を提示している。なお、被験者の B では、同じ霧吹きの冷水という刺激がある時には津波を、別な時には降雪をひき起こしているが、これも大変興味深い。なぜこのような違いが生ずるのであろうか。冷水刺激が与えられた時に B が夢を見ていたか否かを確認するのは実際上きわめて困難であるが、もしも B が夢を見はじめてから冷水刺激を与えられた場合には夢のストーリーの違いが、また、B が夢を見る直前に冷水刺激が与えられた場合には B のその時の身体・精神状況の違いが、津波と降雪という異なる夢内容が出現した理由として考えられよう。

(4) はいわゆる身体刺激の夢である。空腹が「おいしい食べ物の夢」を見せたり、尿意を我慢して眠っている時に尿意が「川で放尿する夢」を引き起こしたりすることは昔からよく知られている。もっとも、同一の身体刺激が誰にも同じ内容の夢を引き起こすとは限らない。例えば、風邪をひいて熱がある時に見る夢は一般にうなされる夢が多いが、内容はさまざまである。これまで筆者が耳にしたものとしては、「糸車に押しつぶされそうになる夢」「手足が大きく膨れて動かせなくなる夢」「渦巻きの中に巻き込まれている夢」などがある。いずれも不快感や恐怖を伴って

いる。また、これは筆者が養護教諭にコンサルテーションを行った事例（渡辺，1983）であるが、ある中学1年生の男子生徒は、発熱（心因性）した時に必ずといってよいほど時計の夢を見た。具体的には、「大きな時計の文字盤の12時と11時の間に中年の男性が一人、文字盤に垂直に立っている。時計の2本の針の一方が、側面が鋭利な刃物のようになっていてその男の首をはねる。はねられた首はものすごいスピードで私の眼前に飛んできて、上昇と下降を繰り返す。顔はすさまじい形相で、目はつり上がり、大きく開けた口からは血が流れている。時計の針が一回転する間に、同じ場所に人間が出てくる。そして、一晩のうちに30～50人くらい首を切られる。こわくて目が覚めた」(D6)、「竜が火を吹いて襲いかかってくる。竜の胴体の模様はいろいろな形の時計だった。こわくて目が覚めたら、夜中の2時だった」(D7)などという時計に関する夢である。この生徒は非常に鋭敏な感受性の持ち主であるが、1年生の2学期になって寮の先輩からいじめられたり、クラブ活動の対人的ないざこざに巻き込まれたりした結果、発熱している時や発熱する直前にこのような恐怖感の伴う時計の夢を見ていた。[コンサルテーションの事例ということもあって、時計それ自体の意味はよく分からなかった。時計は時間を意味するので、何か発達課題上の問題があったのだろうか。]

VI 夢を利用するさいの留意点

1 夢に対する一般的態度

夢というものを治療的に活用しようとする場合、まず何よりも治療者自身が夢に関心を抱き、夢の持つ力を感得しておくことが大切となる。また、夢のもつ魅力性もさることながら、治療者としては夢の持つ危険性をもよく心得ておくことが大切となろう。夢は人間に対して何かある重要な実存的メッセージや洞察をもたらしてくれることもあるが、それ以上に、個々人の自我同一性の中の否定的な要素、つまりは、自分自身や社会にとってとても受け入れがたいような陰の部分を呈示することが多いからである。このような陰の部分を不用意に露呈させると、それによって夢主の心のバランスが壊れてしまうことになる。

夢の持つプラスの面・マイナスの面を把握するには、できるだけ機会を見つけて治療者自身が夢分析を受けてみるとよい。それも可能なら、1週間に3回とか4回のペースでを受けてみるとよい。このような頻回のペースで夢分析を受けてみると、夢の持つ価値がよく分かる（名島，1995d）。

夢日記（dream diary）をつけてみるのも一つの方法である。ただ、自己分析の場合もそうであるが、自分で自分の見た夢を解釈していく場合には中立的な態度を維持することが困難であり、しかも、自分の安全感（security）を脅かすような解釈は意識の外へと排除されやすいので、限界がある。

2 夢分析の準備

夢は誰でも毎晩見ているものである。睡眠中のREM段階において被験者を覚醒させた時の夢想起率は約80%（大熊，1977）であるが、このREM段階は一晩に4、5回訪れる。つまり、人間の場合、誰でも一晩に数個の夢を見ている訳である。その意味では、「夢を見ない」という人は、実際は夢を忘却している人である。

クライアントの中には、「夢なんて近頃まったく見ない」と言い張る人もいる。このような場

合、「これまでの人生で印象に残っている夢（印象夢 impressive dream）」や「人生の一時期、何度も繰り返し見た夢（反復夢 recurrent dream）」を尋ねてみると思い出してくれる人が多い。場合によれば、夢に関する興味深い書物（鱧，1976；河合，1987その他）をクライアントに貸与して、夢に対する関心呼び起こしてもらうのもよい。ただし、夢に対する面接者の側の強迫的なこだわりをクライアントに押しつけることは避けたい。多くのクライアントは、最初は夢を報告してくれなくとも、面接が始まってクライアントの眼が徐々に心の内側に向いていくと、自然に見た夢を記憶し、分析者に報告することができるようになるものである。

夢をまったく見ないと主張する場合とは逆に、面接が始まると急速に夢の中に浸るようなクライアントもいる。それまで外のことばかりに忙しくて心の中にまったく目も向けなかった人が危機を契機に反転して、心の内側に突如向かいはじめ、そのために夢が多量に記憶されるようになることを、筆者は「反転現象による夢記憶の増大」と呼んでいる。一般にこのような人は数多くの夢を報告することが多い。しかし、1回の面接時間内で吟味できる夢の数はせいぜい一つか二つくらいのもので、あまりにも多くの夢を見る人の場合には、それらの中で印象的なもののみを報告してもらうとよい。クライアントが直面しているテーマ（心理・社会的危機）は機会あるごとに夢の中に出現してくるので、クライアントが見た夢をすべて吟味しなければならないという思いにかられる必要はない。

3 夢の記録

(1) クライアントによる夢の記録：クライアントが自分の見た夢を記録して面接室に持ってくる方がよいかどうかについては議論の分かれるところである。Freud (1911, 1933) は、見た夢を書き留めるようクライアントに要求することに反対している。しかし、夢を記録しないまま後になって面接室で思い出すような場合には記憶の著しい歪みが生じやすいので、筆者自身はたとえ簡単なメモ程度のものでよいから夢を見たらできるだけ早く記録しておくように勧めている。

[夢を見た直後に夢主が目覚めたとしても、ほんの1, 2分経つと、夢の記憶は急速に薄らいでしまうのが普通である。したがって、夢を見て目覚めたら、できるだけ早く夢を記録してもらう方がよい。その場合、例えば、「車」「事故」「怪我」といった具合にキーワードだけでも書き留めていると、再び眠って目覚めたあとでその夢を再生するのが容易となる。]

(2) 夢の絵：夢を伝達という側面から見ると、口頭で報告される夢 (orally reported dream)、書くことによって伝達される夢 (delivered dream by writing)、描くことによつて伝達される夢 (delivered dream by painting) などに分けられる。クライアントが見た夢で、言葉だけの報告では分かりにくいような場合には、クライアントに夢の絵を描いてもらうと分かりやすい。また、夢を絵に描いてもらうと、言葉や筆記による報告では抜けやすいもの、例えば夢の場面の背景や風景などがよく分かる。筆者には、20代後半の男性（モラトリウム、失職中）が小学校時代に見た「橋を渡っていて落ちそうになる夢」(D8)を報告した時、夢の状況がよくつかめなかったので絵に描いてもらったところ、彼が、橋を渡っている自分を黒く塗りつぶしたのでびっくりしたというエピソードがある。[その絵は、川面が赤色と黄色に燃え、橋の上の彼の背後の空間には樹木があるが、彼の前方には何もない空白だけというものであった。しかも、橋の上の彼は黒い影であった。これは、発達の危機の最中であることを示す不安夢であった。]

見た夢を絵に描いてもらうためには、面接室に12色の色鉛筆とA4版程度の白紙を常備しておくとうよい。[クレパスやクレヨンも利用できるが、これらはべたつくので保管に不便なところがある。もちろん、クレヨンやクレパスの持つ粘着性と混合性は情動表現に適しているので捨てがた

いところもあるが、筆者自身は色鉛筆が好みである。色彩も、市販の12色の色鉛筆ならほとんどの色が揃っているのだから、あまり不便はない。]

(3) 夢の記録用紙: 治療者の方は、面接記録とは別に、夢の記録用紙を作っておくと便利である。一つ一つの夢についての記録用紙を作っておけば、面接が始まる前にそれを見ることによってこれまでの夢の流れを全体的に再確認できるからである。[記録用紙の具体的な内容は夢についてのクライアントからの情報収集と関係するので、次章を参照されたい。]

VII クライアントからの情報収集

クライアントが夢を見たと言ったら、ケースによって異なるが、一般的には次のような手順できいていく。

(1) 夢のストーリーの初めから終わりまでをきく。特に、結末はどのようなものであったかを忘れずにきく。例えば、「崖から足を滑らせて谷に落ちる夢」なら、足を滑らせてどうなったのか、途中で何かに引っ掛かって助かったのか、それとも途中の岩か何かにぶつかって死んだのか、谷底まで落ちたのかなどをきく。[クライアントの中には見た夢の最初から最後までを詳しく報告してくれる人もいるが、一般的には、夢の報告は簡単であることが多い。そこで治療者としては、「夢の始まりはどんなふうでしたか」「夢の最後はどうなりましたか」といった質問をする。]

(2) 夢の中でクライアントが味わった感情は、クライアントが報告し忘れることがあるので忘れずにきく。その場合、治療者の方から「こわくなかったですか」「爽快でしたか」などと尋ねると、クライアントがそういった質問に影響されることがあるので、「夢の中ではどんな感じ(気持ち)でしたか」といった形で尋ねる方が望ましい。なお、夢の中の感情は、一つの夢の中でいろいろと変化することがあるので、注意しておく。

(3) 夢から覚めた直後の感情や感想をきく。例えば、「もうちょっとで殺されるところだったが、その寸前に目がさめてほっとした」「蛇がまだ身体を這っているような感覚が残っていて、目が覚めても気持ち悪かった。もう二度と見たくない」など。

(4) 夢の各構成要素についての連想を求める。例えば、「小学校の校庭でAさんにいじわるされて泣いている夢」であれば、ここには「小学校の校庭」「Aさん」「いじわる」「泣く」という4つの構成要素があるので、それぞれについてクライアントに何か思い浮かぶことがないかどうか、自由に連想してもらおう。

(5) クライアントが見た夢に名前(タイトル)をつけてもらおう。例えば、「爽快な気分で空を飛ぶ夢」とか、「怪人に追いかけられ、必死で逃げるが、足が思うように動かない夢」など。名前をつけてもらおうと、特に長いストーリーの夢の場合には、クライアント自身がその夢のどこに焦点をあてているかがよく分かる。

(6) クライアントに記憶される夢はほとんど明け方の頃の夢なので、夢を見た前の日の出来事について聞く。また、眠りに入る前に考えていたこと、夢を見た夜の室温や寝相、身体のコンディションなどについても聞いてみる。

(7) 最後に、クライアント自身はこの夢についてどのように考えているかを聞く。具体的には、「この夢についてどう思われますか」「なぜこのような夢をこの時期に見たのでしょうか」といった質問をする。また、「この夢はどんなことをあなたに告げていますか」といった聞き方もよい。

以上は、クライアントからの情報収集である。これらは煩雑なようであるが、慣れればそれほ

どのものではない。豊かな情報が得られるか否かはクライアント次第であるが、分裂病者の場合は概して情報量が少ない。特に慢性例の場合には、夢そのものが「黒い雲がかかっていた」「太陽が出た」などという断片的なものであることが多い。もっとも、夢そのものは豊かでも、夢を言語化し、言語化したものを他者に伝達する機能が低下している可能性はあるが。[同じ分裂病でも軽症例や、境界例との異同が問題となるようなケースでは夢は豊かである。また、慢性例でも、治療関係が深まっていくにつれて、当初貧弱であった夢が次第に豊かでドラマ的なものとなっていく場合がある。]

VIII 夢の意味をつかむさいの留意点

クライアントから夢についてのさまざまな情報を収集し、得られた情報について話し合っている間に、治療者の脳裏にはさまざまな仮説が浮かんで消えていき、最終的に夢の意味が2つか3つくらいに絞られてくる。以下、夢の意味をつかむさいの留意点について述べたい。

1 図式的な変換の問題

できるかぎり治療者の側の一方的な意味づけは避けたい。例えば、女性のクライアントの夢の中に蛇が現れたら、ただちにそれを「男性性器」に置き換えるといったやり方は疑問である。このような図式的な変換は昔の夢占いや夢判断に類するものであろう。たしかに、形態や機能の類似性からして蛇が男性性器（快楽への誘惑者）を意味する場合ももちろんある。しかし、それ以外にも蛇の持つ意味としては、(1) クライアント自身の中の「蛇的な」部分（執念深さや底意地の悪さ）、(2) クライアントと関わりのある「蛇的な」人、(3) クライアントの中の聖的な部分（聖性の蛇）、(4) クライアントの心の中に音もなく侵入してくる「蛇的な」面接者（おぞましい蛇）、(5) 男性の有する逞しさや権力への志向（蛇＝男性：ペニス羨望の社会的側面）、(6) 人生上の危機（進路を妨害する蛇）、(7) 悪の源（誘惑する蛇）、(8) 再生と長生（吉野，1979）、(9) 脳脊髄組織の中でも特に延髄や脊髄（Jung, 1968）、(10) 治癒神（Jung, 1968）、(11) 性的解放→自己解放の象徴（Bonime, 1962）、(12) 恐怖や不気味さといった情動の表現（鱷，1973）、(13) アニムスの原初的な形象（河合，1976）などさまざまである。しかも、夢の多重性や多層性によってこれらが複雑に絡み合ったりもする。つまり、「蛇」というイメージに投影されるものは、クライアントによって異なるし、また、同一のクライアントの場合でも、発達段階や対人的な文脈によって異なってくる。したがって、治療者としては、可能な限り夢についてのクライアントの連想や、前日の対人的な出来事と夢との関連性を重視する。

ただし、クライアントの中には、非常に断片的な夢しか報告せず、しかも、その夢についての連想も感想も大変貧弱な人がある。このような場合には、治療者が有している夢についての豊富な知識から夢の意味を推測していくしかない。また、クライアントが報告してくれる回想夢の中で4歳や5歳の頃の夢は一般に断片的であり、その夢についてのクライアントの連想もほとんどないことが多い。このような場合にも、治療者の側の推測に頼らざるをえない。[人生最早期に見られた印象夢は、夢主自身が中年期や老年期に入ってようやくその真の意味がつかめるような場合が少なくない。]

2 系列としての夢

一つだけの夢でなく、夢を系列（シリーズ）としてみていくと、クライアントの基本的なテーマや治療経過が分かりやすくなる。[これは、絵画療法の場合も同様である。1枚だけの絵よりも、子どもが描く一連の絵をみていく方が内的テーマをつかみやすい（名島、1982b）。]

夢を系列的にみていく場合、変化しないもの（基本的な葛藤や基本的な対人パターン）に留意する。逆にまた、変化するものにも留意する。例えば、夢に出現する人物がどのように変化しているか、夢の内容がどのように変遷しているかといった点に留意する。それまで失敗や破局に終わる夢、廃墟の夢、不安に満ちた夢などばかり見ていたクライアントが、ある時点から成功したり喜びを感じるような夢を見るようになれば、これは、治療によってクライアントのパーソナリティが再構築されつつあることを意味しよう。ちなみに中井（1974）は、急性分裂病状態が終結して寛解過程へと転換する場合、この寛解期前期において「再建夢系列」が見られると述べている。この再建夢系列は、悪夢に近いものから始まって次第に現実原理に則した統合へと向かう一連の夢系列である。

Hall（1947）が提唱したスポットライト・ドリーム（spotlight dream）は臨床的有用性がある。Hallにとって夢とは、夢主の現在の葛藤を解消しようとする試みを表すものであり、したがって夢の中にはその人の基本的葛藤が現れてくることになる。彼の言うスポットライト・ドリームとは、夢の意味が自明であり、かつ、あたかも暗闇の中に光線を射込むスポットライトのように、夢主の基本的葛藤（主要な葛藤）を照らし出すような類の夢である。Hallのやり方を具体的に言えば、まず夢主が見た一連の夢の中からスポットライト・ドリームを捜し出し、このスポットライト・ドリームから得られた仮説（例えば、「自立的な生活を確立したいという願い」対「家族が提供する安全性を捨て去ることへの恐怖」という基本的葛藤）が残りの他の夢にもあてはまるかどうかを吟味していく。

3 夢の中の対人パターン

夢の中に見られる対人パターンに注目する。例えば、ある内向的な男性クライアント（20代）は、「最近付き合いはじめた（同性の）友人から理不尽に非難されて腹を立てるが、後の報復を恐れて沈黙している」（D9）という夢を見た。ここには、「友人からの攻撃→怒り→怒りを表出したい願望→友人からの報復への恐れ→沈黙（受動的抵抗）」という一連のパターンが見られる。そこで面接者はクライアントに、「このようなパターンは過去においてもありましたか」と尋ねてみた。するとクライアントは、クライアントの父親（死去）に対する関係がこれとそっくりのパターンであったことを想起した。

上の例に見るように、夢の中に現れるクライアント特有の対人パターンは、過去の重要人物とクライアントとの関係が現在に転移されたものであることが少なくない。その場合、1回だけの夢ではなくて、クライアントが見る多くの夢に共通して出現する特定の対人パターンは転移性のものである可能性が高くなる。[夢の中の対人パターンを考える場合、Luborsky（1984）が提唱したCCRT法（Core Conflictual Relationship Theme）は参考になろう。これは、面接場面においてクライアントが語った数多くの対人的エピソードを、W（Wish：クライアントの願望・要求・意図）、RO（Responses from the Object：対象の反応）、RS（Responses from the Self：自己の反応）という三つの主題要素に分類し、最も頻度の高いW、最も頻度の高いRO、最も頻度の高いRSを抽出するものである。ちなみに、久保（1991）はこのCCRT法を大学生の夢に適用し、夢分析の結果とCCRT法によって抽出されたものとの一致度が高いことを見いだしている。]

4 夢の中の感情

感情には、不安や怒り、喜び、悲しみなどさまざまなものがあるが、夢の中にどのような感情が現れているかをみきわめるのは、クライアントのパーソナリティを理解する上で大変重要である。ともすれば、治療者の目は夢の内容や筋ばかりに向きやすいので注意する。なお、夢の報告の中に感情が何も語られなかった場合には、「この夢を見ている時、あなたはどのような気持ちがありましたか」といった形できいてみるとよい。

Bonime (1962) は、夢の中の感情を体験された感情 (experiential feeling) と象徴化された感情 (symbolized feeling) の2つに分けているが、このような区別は有益であろう。例えば、抑うつ状態にあったある若い歯科医 (Bonime, 1962) は、「私の車が真っ赤になってゴーゴーと燃えていました。車は突然、子どもほどの大きさに縮み、ひとりでバックしはじめました。私は急にこわくなりました」という夢 (D10) を見た。この場合、体験された感情はもちろん恐怖であるが、象徴化された感情は、この夢では「真っ赤になって燃えている車」(烈火の如き怒り：車はクライアントの自己)である。同様に、夢の中では、クライアントが平素自己否認している寂しさが「人間の気配のないパーティ会場」として、クライアントの抑うつ感が「ひどくだるい足」といった形で象徴化されたりする。体験された感情に比べて象徴化された感情の方は見過ごされやすいので、注意する。

5 夢の中の動き

夢主が夢の中でどのような動きをしているかに留意する。D3 でみたような戦場の場面を例にとると、夢主の動きとして、(1) 夢主が戦場で鉄砲を撃つ、(2) 戦場から逃げ出す、(3) 戦場にいるが夢主自身は鉄砲を撃たずに負傷者の手当てをするなどが考えられる。この場合、(1) は夢主の立ち向かう態勢、(2) は回避の姿勢、(3) は介護役といった具合にそれぞれの意味が異なってくる。[戦場そのものの意味はケースによって異なるが、父親との戦い、母親との戦い、治療者との戦い、社会 (不特定多数の他者) との戦いなどさまざまである。]

6 夢の結末

同じ空を飛ぶ夢でも、(1) 空を高く飛んだ後、頭から地上に落下する、(2) いったん地上に落ちていくが、腹を地面にこすりながらも何とか飛行を続ける、(3) 地表を見下ろしながら快適に飛行を続けるなど、結末はさまざまで、それぞれに意味も異なってくる。一般的に言って、良好な結末は、クライアントの自我機能の健全さを意味する。ちなみに安永 (1978) は葛藤解決の成功度に応じて、夢を、(1) 解決夢 (真の解決に到達)、(2) 妥協夢 (中途半端なままで終了)、(3) 悪夢 (破局的な結末) の三つに分けているが、このような視点も参考になろう。[大学生を対象とした清水 (1983) の調査では、自我同一性混乱尺度 (砂田, 1979) の得点が高い者は、そうでない者に比べて、夢の結末が悪い。つまり、同一性の混乱度が高い大学生は夢の結末が悪くなる。]

7 夢の中の時間

時間がはっきりしないような夢も少なくないが、夢が報告された場合には時間に注意する。夢主自身が夢の中に出てくる場合には、比較的時間は分かりやすい。例えば、子どもの姿をした自分とか、現在の姿の自分とか、逆に現在よりも年老いた自分など。夢主以外では、故郷の場面とか未来都市の場面など。もちろん、一つの夢の中で時間が過去から現在へ、現在からまた過去へといった具合に移行する場合もある。また、現在の自分の姿ではあるが、身につけている着物は

小さい頃の着物であるとか、現在の姿をした自分が小学校の同級生たちと校庭で遊んでいるといった具合に、現在と過去とが混在している場合もある。

8 夢の背景

夢の中の登場人物や出来事だけでなく、夢の背景にも留意する。背景は、いわゆる風景の形をとっていることもあるが、中には黒っぽい色とか白色といった具合に色彩のみの場合もある。風景の場合には、自然の様態（生气に溢れた春の野山、荒涼とした砂漠など）や建物の様態などに注意する。背景が色彩の場合、ある特定の色が心理的な意味を帯びている場合がある。例えば、黒っぽい色がクライアントの潜在的な抑うつ感を意味していたり、白色がクライアントの過去の外傷的な出来事（例えば、暴漢の精液の色）とか、母の乳房（乳汁の色）を暗示していたりする。

9 夢に関する抵抗

クライアントの中には、「夢なんてまったく興味ない」「夢の話をして面白くない」などと何度も繰り返す人がいる。このような場合、治療者としては、夢に対するクライアントの拒否的態度の理由を考えてみるのがたいせつである。例えば、40代後半のある女性クライアント（境界例）は、筆者が夢を尋ねると夢の粗筋だけは話してくれるが、その夢について二人であれこれ吟味しようとするると彼女はきまって、夢なんて面白くないと言って拒否した。そこで筆者はある時、夢に対する拒否の理由を質問した。彼女は最初、夢の話をしていると面接時間がなくなるので自分が話したいことが話せなくなると言っていたが、面接の最後に、自分はこれまでいろいろな人に利用されてきたと語った。つまり、筆者が彼女の夢の中に立ち入ることは、彼女にとっては、筆者が彼女を利用するような手がかりを筆者に与えるかもしれないという転移性の不安を呼び起こすものであった。

10 目覚めの世界との対応性

夢の中に特定の人物が出てきた場合、実際の人物とどのように対応しているかに留意する。例えば、ある女性クライアント（大学4年生、偏頭痛）は、「友人の母が私の所にやってきて、うちの娘に関わらないで下さい、娘が勉強しなくなったのはあなたのせいです、と言った。そのあと、3人くらいのおばさんたちが私に文句を言った。私は、そんなことないと必死で抗弁した」という夢（D11）を見た。夢の中の友人の母は、クライアントが一番仲良くしている友人の母で、「やさしい人」（クライアントの言葉）であり、クライアントは実際には、この母親から夢の中のように文句を言われたことはなかった。また、「おばさんたち」から文句を言われたこともなかった。この夢を見たクライアントは強度の偏頭痛の他、肋間神経痛もあってよく寝込み、「どうでもいいやという性格」になっていた。そして、友人の家に行っては長時間遊んでいることが多かった。結局、この夢に出てきた「友人の母」や「おばさんたち」は、クライアントが自分の心の中の自責感を実際の人物に投影したものであった。

夢の中に夢主が出てきた場合、夢の中のクライアントと覚醒時のクライアントとの相違に注意する。例えば、あるクライアントが、面接の場では断固とした口調で、自分は他人から非難されるようなやましいところは何もないと主張するが、夢の中に出てきた彼自身は、どこかの家に盗みに入っていたとすれば、ここには、「清廉潔白な自分」（覚醒時）と「盗人の自分」（夢）という矛盾する二つの自己像が存在する。[この場合、面接場面における言語的介入としては、「清らかで良い自分と、汚れた悪い自分とがあなたの中には共存しているようですね」「あなたは面接では

良い自分ばかりを強調しておられましたが、夢の中の自分と矛盾するようですね」といった直面化 (confrontation) が考えられよう.]

11 分かりにくい夢

夢の中には一見奇妙で、まったく意味のないようなものもある。しかし、このような場合でも、すぐに無意味なものとして切り捨ててしまわないで、辛抱強くあれこれと考えていると、少しずつ意味が汲み取れることもある。例えば、筆者自身がアメリカで夢分析を受けていた時、筆者は「Bayish という文字だけの夢」(D12)を見た。英語の bay は湾という意味だが、bayish という単語はない。夢を見た当初、筆者自身にも分析医 (男性アメリカ人：対人関係学派) にも何のことか訳が分からず、筆者は夢が言葉遊びでもしたのだらうかくらいに思っていた。そして、次から次へと新しい、しかもきわめて印象的な夢が出てくるので、この夢の吟味は特にしなかった。しかし、夢分析がすべて終わった後、もう一度気になっていたこの夢のことを考えてみた。その結果、次のようなことが推測された。

(1) 文字が英語であることは、英語圏の国において日本人の筆者がアメリカ人に英語で夢分析を受けるといふ文化的な圧力を意味するのではないか。(2) 辞書を調べてみると、“be at bay”で「窮地にある」という意味があるが、当時の筆者は確かに、心理的には追い詰められた状態にあった。(3) bay の b は夢では大文字の B となっていたが、固有名詞の B なのか。もし固有名詞であるとすればそれは、Maryland 州にある Chesapeake Bay であろう。この湾の奥には Baltimore がある。Baltimore は、分析家であった Clara Mabel Thompson (1893-1958) や Harry Stack Sullivan (1892-1949) ゆかりの地である。より具体的に言えば、Sullivan が初めて Thompson と会ったのは、1923 年、Baltimore にあるヒップスクリニックの研究会で Thompson が精神病者の自殺について発表した時である。[筆者の分析家は、Thompson や Sullivan に指導を受けた人であった。] (4) bay に ish という接尾辞がついたことの意味はよく分からない。-ish という接尾辞には、例えば childish のように「…じみた」とか、whitish のように「…がかかった」という意味があるので、これは、分析家に対する筆者の密かな不満、つまり分析家が Thompson や Sullivan その人ではないという不満を表しているのかもしれない。

このように、当初は報告者自身にも治療者にも見当がつかないような夢でも、じっくりと吟味していくとそれなりの意味が推測できることも少なくない。

12 治療者側の問題

クライアントに対する治療者側の同一化や投影が夢の意味を見えなくさせる場合がある。例えば、「顕在的な境界水準で機能する自己愛的人格」(Kernberg, 1974) の特徴を有するある女性クライアント (30 歳) は中絶後、「まだ目の開かない赤ん坊の夢」(D13) を見、その数カ月後には、「おろした子どもが 3 歳くらいの幼児になって出てきた夢」(D14) を報告した (名島, 1980a)。これを聞いた筆者は、クライアントが夢の中で子どもを育てていることに感動した。そして、この夢は、クライアントが心理的なレベルで母親として成熟しつつあることを意味していると考えた。しかし、あるスーパーバイザーから、「それは病的ではないか」という指摘を受けて考え込んだ。その結果、(1) この夢は死児との分離ではなく、逆に死児との幻想的な癒着を示していること、(2) 面接はむしろクライアント側の非現実的な自己愛的世界を強化していることに気づいた。この場合、筆者は、内的にも外的にもみじめな状況にあったクライアントに同一化していたので、適切な距離からクライアントの夢を考えることがむづかしかった訳である。[この

場合の同一化は、正確に言えば、調和型同一化 (concordant identification) (Racker, 1968) である.]

以上、夢の意味に関する 12 の留意点について述べたが、その他、夢解釈に関する Freud や Jung の諸論文を読んでみると、臨床的にみて参考になることが多い (名島, 1990, 1991)。

IX 夢の意味の伝達

夢から推測された事柄をどのようにクライアントに伝達するかということは、夢の意味を解明することに勝るとも劣らない意義を有している。以下、伝達に関する留意事項について述べたい。

(1) 治療者が推測したものをクライアントに伝達することが適切か否かを考える。クライアント自身が自分の見た夢からそれまでにない新しい視点をどんどん得ていくようであれば、治療者側の「解釈」をわざわざ伝達する必要はなくなることが多い。

(2) 夢の意味を伝達する場合、クライアントに伝達する時期を考える。特に、クライアントの陰の部分伝達する場合には、クライアントが治療者の言葉の内容を自我に統合するだけの力を有しているか否かを考慮する。なお、実際に伝達する場合には、クライアント自身がよく分かるような言葉を用いて伝達する。できるだけ学術用語は使用しない。

(3) 解釈投与は治療者側の断定的教示ではなく、クライアントに対する治療者からのコミュニケーションである。この、治療者からのコミュニケーションによって、他者と自分との関係がクライアントにとって以前よりもよく分かるようになること、クライアントがそれまで維持してきた解決法や対人関係のパターンがゆさぶられることが重要である。別の角度から言えば、クライアントにとって重要なのは、夢についての治療者からのフィードバックによってクライアントが前よりも生きやすくなること、何よりも生きるということに対してクライアントが能動的になることが重要である。[夢というものにもし隠された目的があるとすれば、それは、夢主に対して、夢主が夢主自身の発達段階 (ego identity の発達段階) を昇っていくよう要請することではないかと思える。さまざまな内的・外的困難が襲ってくるにもかかわらず、人生を放棄しないで、夢主本来の発達段階を昇っていくという能動性 (activeness) を回復してあげることが治療者の役割となる。]

X 治療者－クライアント関係と夢

1 インテーク面接段階の夢

インテーク面接、つまり心理学的査定のための面接においてクライアントが報告する夢は、治療者－クライアント関係が関係していないので、純粹にクライアントが置かれている心理・社会的危機状況を反映していることが多い。ただし、クライアントが予め、治療者の評判や講演を聞いていたり、治療者が書いた書物などを読んでいて、治療者に対して何か特別の先入観を有している場合には、そのような先入観が夢に影響していることがあるので注意する。

2 双方向的吟味

面接が始まってから報告されるクライアントの夢の意味を考えるさいには、双方向的な吟味が必要である。例えば、「治療者からこっぴどく叱られている」という夢をクライアントが見た場合、可能性としては、(1) クライアントが治療者から厳しく叱られたいと思っている、(2) クライアントに対する治療者の潜在的な怒りがクライアントの無意識にキャッチされ、それが厳しい治療者像としてイメージ化されているという二つのものがある。したがって、クライアントの夢をすべてクライアント自身の欲求に還元して考える前に、治療者自身が自覚していない治療者側の動き（声調や表情）がクライアントの夢に何らかの影響を与えているのではないかという視点から考えてみるとよいだろう。このことはまた、クライアントについて治療者が見る夢についてもあてはまる。

3 治療者についてクライアントが見る夢

面接が始まってからクライアントが見る夢は、治療者との関係が夢の刺激源となっていることが少なくない。その場合、クライアントの夢の中に直接治療者自身が現れて、クライアントと一緒に食事しているとかクライアントを叱っているといった夢は分かりやすい。また、治療者とは別の人物が夢の中に現れているが、しかし、その人は治療者の物と同じような眼鏡をかけていたとか、その人の口調が治療者とそっくりであったなどという場合も分かりやすい。[「分かりやすい」というのは、治療者と同定しやすいという意味である。夢の意味という点では分かりやすすくないことが多い。]

分かりにくいのは、治療者像ないし治療者の属性が夢の中に出現しない場合である。これは筆者のスーパービジョンの場で検討された夢であるが、40代後半のある女性クライアント（境界型分裂病）は、「熱湯を頭から浴びせられてやけどする夢」（D15）を見た（栗崎，1995）。この夢では治療者（女性）自身は姿を現してはいない。しかし、クライアントがこの夢を見た前日には、治療者との面接があった。そして、その面接で、治療者はクライアントに対して、クライアントが元気になっているからという理由で面接の終了を提案していた。結論から言えば、治療者はべったりとすがりついてくるクライアントに対して逆転移感情を抱き、それによって「面接の終了の提案」という行動化を行ったのであるが、しかし、この唐突な提案はクライアントの心の中の見捨てられ不安を急激に惹起し、この見捨てられ不安が熱湯によるやけどの夢として映像化された訳である。このように、クライアントが何かある印象的な夢を見た場合には、治療者側の動きがその一因となっているのではないかという視点からその夢を考えてみるとよい。

4 クライアントについて治療者が見る夢

クライアントについて治療者が見る夢、すなわち逆転移データとしての夢の詳細は次章で改めて検討するが、一般的に言って、夢の中でクライアントから非難されるとかクライアントと一緒に海岸をデートしているといった夢は直接的で分かりやすい。しかし、クライアントの姿がない場合には、クライアントとの関係が刺激源なのか、それともクライアント以外の人との関係が刺激源なのか、さらにはクライアントとクライアント以外の人との関係が二重に重なり合っているのか、あるいはクライアントとはまったく関係なくて治療者自身の個人的な危機が夢に反映されているのか、そのあたりが非常に分かりにくいことがある。もっとも、1つの夢だけでなく、夢をシリーズとしてみていけば、このあたりのことはかなりはっきりするものである。いずれにしろ、夢は Freud (1900) が的確に指摘しているように多重決定的なものなので、単純に割り切らない

で、いろいろな角度から吟味していくことが大切なように思える。夢の世界の持つ曖昧さや非合理性は、夢の欠点というよりも、人間の生の営みの特徴そのものであろう。

XI 逆転移データとしての夢

精神分析療法ならびに精神分析的心理療法においては、治療者側の逆転移が大きな問題となる(名島, 1977, 1980b, 1980c, 1981)。Freud が初めて逆転移(Gegenübertragung, countertransference)という言葉を用いたのは、1909年6月7日のJungあての手紙(McGuire ed., 1974)であるが、それ以後Freudはさまざまな論文の中で逆転移のことに触れている。Freudの言う逆転移は、「治療者側の合目的でない情動」「統制されていない生の無意識的情緒」「治療上の名誉心」「コンプレックスや内的抵抗」などであり、彼は、これらは治療妨害的なものなので、自己分析や教育分析によって排除すべきであることを強調する(Freud, 1910, 1937)。このように、Freudの逆転移観は基本的には排除・克服モデルである。Freudにあっては、治療者の無意識という「受話器」の性能を逆転移によって低下させてはならない訳である。

しかしながら、Freudの主張にはいくつかの難点がある。例えば、(1)Freudは転移の持つ両面性(陽性転移は治療促進的、陰性転移は治療妨害的)を強調しているのに、逆転移に関しては治療妨害的な側面しか強調していないこと、(2)Freudは転移の持つコミュニケーション機能を重視したのに逆転移に関してはそれを認めないことなどである(名島, 1980b)。ともあれ、逆転移はFreudの死後、逆転移の定義・内容・機能などがさまざまな人々によって吟味され、徐々に逆転移のもつ治療的側面が強調されはじめた。例えば、Heimann(1950)は、治療者の生の情緒的反応が患者の内的過程の重要な指針(pointer)になるとし、Weigert(1952)は、逆転移は情動的なガルバノメーター(emotional galvanometer)であるとし、Tower(1956)は、治療者が自分の逆転移構造を理解することは患者の転移神経症を情動的に理解するための媒介物(vehicle)になると述べている。このように、逆転移というものを治療促進的な側面からとらえた場合、クライアントについて治療者が見る夢も、逆転移データとして利用できることになる。言い換えれば、治療者が見る夢は治療者自身の神経症的葛藤の現れではなくて、むしろ、クライアントの精神内界を理解したり、クライアントの無意識的欲求を感受する重要な資料として活用できることになる。

精神分析家の中で初めて、治療者が見たクライアントの夢を吟味したのはFreud(1900)自身であった。Freudは1895年7月23日から24日にかけて見た「イルマの夢」を吟味し、この夢を自己分析した結果、イルマやオットーに対するFreudの願望充足(復讐心)を見いだした。ただし、Freudはこの夢をどのように治療に活用したかはまったく触れていない。おそらく、活用しなかったのではないかと思える。

逆転移データとしての夢を治療に積極的に利用したのはおそらく、Jung(1917, 1937, 1968)が最初の人であった。ヨーロッパの良い家庭の出ではあるがジャワで生まれ育ち、「バビロンの偉大な売春婦」というあだ名を持っていた20代のある若い女性(未婚、高い知能、劣等感)の夢の意味がよく分からなくなり、また彼女との対話も狭まってきた頃、Jungは、高い丘の上に立つ城の欄干に腰を下ろしている彼女をJungが見上げているという夢を見た。この夢についてJungは、夢の中で彼女を見上げていたことは意識では彼女を見下していたのだと自己解釈し、翌日そのことを彼女にそのまま伝えたところ、治療は好転しはじめたという。ここには、夢は意識の態度に対する補償であるというJung独特の見解と、治療者が見た夢と夢の意味をクライアントに

直接伝達するという治療的工夫がみられる。

その後、Tauber (1954), Whitman et al. (1969), Myers (1987), 河合 (1988a, 1988b), Watson (1994) らがクライアント (患者) について治療者が見る夢の意義を本格的に論じている。中でも Myers は、4人の患者について彼自身が見た4つの夢の自己分析を通して、(1) 治療者が患者について見る夢を分析することは、患者に対するさまざまな逆転移反応を解消するための貴重な手助けになる、(2) 患者の夢について自己分析していくという作業を通して、治療者は、治療者自身の分析から派生したもろもろの傾向 (trends) を分析しつづけることが可能になると共に、患者の心理力動についての重要な洞察をうることができる、と結論づけている。また、Watson は、上述の Myers や Watson 自身が見た夢を検討して、治療者が見る夢は患者の力動性と対人関係的な事柄をよりよく理解することに役立つとし、治療者が見る夢を実際に患者に提示するという技法 (the technique of actually presenting a dream to the patient) については、(1) この技法は大変有益であるが、もっぱら分析治療が行き詰まった時に用いるべきである、(2) 最も効力を発揮するのは、患者が何年もの間治療を受けていて、患者との間に強力な作業同盟 (working alliance) ができあがっている時である、(3) この技法は患者と治療者がお互いに協力しあっているという気持ちを作りだすと共に、治療の中でのさまざまな対人的・相互交流的な事柄を探索するのに大変有益である、とまとめている。

ここで、筆者自身が見た夢を例として挙げたい (名島, 1978, 1980a)。クライアントは D13, D14 を見た人である。彼女 (初回面接時 30 歳) には、(1) 種々の行動化 (頻回の自殺未遂, 入院中の他の患者に対する暴力や脅し), (2) 富める者, 幸せな人に対する羨望 (envy) と、羨望に対する防衛 (否認と価値切り下げ), (3) 相互に分裂されている自我状態, (4) 治療者に対する陽性転移と陰性転移の急速な交代, (5) 過去において彼女を拒否した母親に対する強い憎しみといった特徴があり、彼女との面接は筆者にとって当初からむつかしいものであった。彼女は筆者の頭の悪さを嘲り、勘の悪さを罵倒し、自殺行動によってできた傷あと (火傷痕) を痒いからと言って筆者に無理矢理搔かせ、しかも、ある時には、筆者が彼女の傷あとをあざ笑ったとして筆者を攻撃したりした。このような状態の中で筆者の心には、自己無価値感、罪責感、憎しみ、あわれみなどさまざまな感情が生じ、同時に、「少年の姿の私は山の中を追われるように走り回るが、どうしても出口が見つからない夢」(D16) が頻発した。

D16 は筆者の基本的安全感 (basic security) が脅威にさらされていることを示しており、同時に、治療上の危機をも示している。このような時に筆者は、クライアントについての夢を二つ、同じ夜に見た。一つは、「私はどこかに行こうと焦って車を運転している。ハッと気づくと私の下半身は、彼女がよく面接室 (病院内の一室) に着てくる薄地のピンク模様のパジャマ。私はひどい困惑状態のまま運転を続ける」という夢 (D17)。もう一つは、「裸の女性が喜々として水とたわむれている。ふと見ると、女性の両足は爪先を上にして Y 字型に水面から突き出ている。豊満な女性の下半身といった印象。皮膚はミルクのように滑らか。筆者が好奇心にかられて近づくと、視界は自動的に水面下になる。水底に女性の上半身がある。彼女によく似た顔立ちだが、無数の皺が寄り、皮膚は青白い。死人だと思うが、今にも呻き声が聞こえてきそうな気配がある」という夢 (D18) であった。D17 は当時の筆者の焦りと困惑をそのまま示しているように思えたが、D18 については筆者は長い間考えこんだ。その結果、(1) 一見豊かな女性だが内実は「死人」という彼女の本体、(2) 筆者の抱いた好奇心という、彼女に対する知的な関心、(3) 筆者の側の冷たい欲望 (学問的関心) と対応して生じていた彼女の側の非情さといった事柄が洞察でき、それによって、筆者はやっと、彼女の中にある女としての悲しみといったものに目を向けることができる

ようになった。

要約すると、筆者は、彼女からの度重なる転移性攻撃によって自尊心が損傷し、自尊心の損傷に対する報復としての憎しみや、自己無価値感に対する防衛としての罪責感が生じてきた（名島、1979）。その結果、何度も自殺を図るほど追い詰められた女性、入院治療という形で身内から隔離された女性、身体のあちこちに人目をひくような傷あとをつけた女性といった、彼女の女としての悲しみの側面に目を閉ざしていた訳である。

逆転移データとしての夢はこのように、クライアントの本当の姿を伝えてくれたり、治療上の危機を抜け出すための手掛かりを治療者に与えてくれることが多い。また、ケースによれば、Watson (1994) が強調しているように、治療者が見た夢をクライアントに話すことによって治療上の行き詰まりが打破されることも少なくない。

XII 治療経過と夢

1 治療初期

治療初期には特に紹介夢 (introductory dream) に留意する。紹介夢は初回夢 (initial dream) とも言う。紹介夢 (初回夢) は、治療が始まってからクライアントが最初に見る夢で、クライアントが直面している困難の本体や、分析者に対する期待などを含んでいることが多い。[初回だけでなく、面接初期に見られる夢を総称して初期夢 (initial dreams) と言うこともある。] 紹介夢はまた、夢の意義や夢の取り扱い方をクライアントに教示する良い機会ともなる。

クライアントが見る治療初期の夢には、治療の今後の展望が含まれていることが少なくない。この点について鑪 (1984) は、未知の人から金をせがまれる夢、訳の分からない買物をして途方にくれる夢、乗物に乗っているが何処に向かっているか分からない夢などは否定的展望を、一方、学校の先生から教えてもらっている夢、立派な心地よい車に乗せてもらって安心している夢、誰かと一緒に楽しく道を歩いている夢などは肯定的な展望がうかがえるとしている。

2 治療中期

治療中期には治療のプロセスが進んでいるので、クライアントの夢の中には、クライアントの持つ中核的な病理構造やコンプレックスなどが出てくることが多い。

また、治療中期には、分析者に対する陽性・陰性転移がクライアントの夢に現れてきやすい。つまり、転移夢 (transference dream) が現れてきやすい。夢の中には、治療者そのものが出現することもあるし、誰か別の人物の姿で出現することもある (X 章を参照)。もっとも、分析者に関する夢をすべて、転移、つまり過去の重要な人物との対人関係の、現在への移し変えという観点から見ていくのは正しくないことがある。というのは、治療場面における分析者の側の現実的な動きに対するクライアント側の反応がそのまま夢に現れることがあるからである。

3 治療終期

治療終期には終結夢 (terminal dream, termination dream) が生じやすい。これは、治療者とクライアントが面接の終結について話し合っている時期に見られるものである。物理的な事情か何かで予め面接の終結の時期が分かっている、その時期が近づいた頃に見られる場合もある。

[Cavenar & Nash (1976), Cavenar & Spaulding (1978) は、治療者と患者が終結について話し

合う前に出現し、しかも治療者と患者の双方が終結のことを考えるような性質の夢を終結信号夢 (termination signal dream) とよんでいる。なお、このような夢が生ずるためには、患者の主な葛藤が徹底操作され、転移が解消され、自我機能が容認できる水準にあるといったことが必要である。]

終結夢の内容はさまざまで、治療者から離れていくことへの不安や葛藤に関するものが少なくない。中には文字通り、夢の中で治療者に別れを告げている夢もある。この場合、別れの夢を聞かされた治療者の心の中に不安が生ずる場合には、不安の源泉をよくよく吟味し、場合によれば率直にそのことをクライアントと話し合う方がよい。不安が治療者の逆転移に起因していることはもちろんあるが、そうではなくて、治療者から離れることがクライアントにとってまだ早すぎる場合があるからである。いずれにしろ、長く付き合ってきた治療者との関係が終わりになることは、治療者とクライアントの双方にとってさまざまな感慨や感情を引き起こすものである。

ここで一言付け加えておくと、治療の中断 (interruption) の問題がある。これはいわば、やむをえない終結である。クライアント側の事情で面接が中断する場合はともかく、治療者側の転勤などによって中断する場合には注意が必要である。筆者は他県に転勤する前に、「分裂病と精神遅滞の二人の女性が私に迫ってきて、二人の中の一人が私の肩に噛みつく。私は、こうされても仕方がないと思う」という夢 (D19) を見た (鑪・名島, 1981)。筆者がこの夢を見た時点では、入院中の二人の女性は筆者の転勤のことを知らされていなかった。したがって、この夢は、転勤によって二人の女性を見捨てようとしている筆者の側の罪責感と、予想されるクライアント側の傷つきの激しさを表している。このように、中断は治療者とクライアントの双方にとってさまざまな反応を引き起こすので、中断せざるをえない時にはできるだけ早くクライアントにそのことを告げ、治療者とクライアントとの間で別れの作業をすることが大切となる。

XIII 夢分析の対象

1 夢分析が有効な場合

夢は誰でも見ているので、夢を媒介とした面接は誰に対しても可能である。ただ、本稿で述べているような夢分析は、神経症圏内と境界例のクライアントたちに最も有効である。

年齢の点について言えば、夢は新生児も見ていると言われているが、彼らは言語報告ができないため夢を見ていることの直接的な証拠がない。しかし、2, 3歳以降になると夢の報告も可能となるので、夢を手掛かりとして幼児の心的世界を推測することが可能となろう。もっとも、夢分析には夢の報告だけでなく、夢の構成要素についての連想が必要であり、この点を考慮すれば、夢分析の適用はだいたい小学生以降ということになろう。

視覚障害児・者でも生まれつき目の見えない人の場合、彼らの夢はわれわれが通常見るような視覚的な夢ではない。しかし、彼らは聴覚的・触覚的な夢は見ているので、夢分析は可能である。

[角田 (1957) の調査によれば、先天性全盲の夢の内容は、視覚が 31.5%, 聴覚 55.0%, 触覚 8.5%, 味・嗅覚 3.5%, その他 1.5% となっている。ここでは視覚的な夢が 31.5% 報告されているが、これは角田自身も考察しているように、「正常人との共通な社会的生活を営む上での便宜的な面から覚え込んだ視覚的ボキャブラリー」によるものであろう。つまり、彼らの「視覚的な夢」は、実は、視覚的な表現を用いて報告された夢にすぎないものである。]

2 夢分析を控えた方がよい場合

クライアントがあまりにも夢の世界にのめり込みすぎて、社会生活に支障をきたすようであれば、夢分析は中止した方がよい。特に、クライアントが仕事を持っていて外来面接の形でやっている場合には、そうである。もっとも、このようなケースはめったにない。ただ、精神の病の影響でクライアントの自我機能がひどく低下している場合には、「夢の世界」が「目覚めの世界」に侵入してくることさえある。

クライアントから報告された夢を分析者自身が受け容れられないような場合にも、夢分析は行わない方がよい。例えば、「人間の肉を食べている夢」(D20)。この夢を報告してくれたクライアントは当時 38 歳、分裂病で 3 回目の入院中。発病以来約 10 年が経過。クライアントは院内の面接室に入ってくるなり、「先生、変な夢を見た。人の肉を食っていた。気持ち悪かった」と述べた。話をきいてみると、夢は、「夜、薄暗い所で何かを噛んでいた。鮭の切り身みたいだった。臭い匂いがしていた。目の前に人間の肉の切り身があり、私は思わず口の中の物を吐きだした。そこで目が覚めた」というものであった。彼自身気持ち悪かったと述べているので、この夢は自我異和的なものであり、その点では筆者は安心できたが、しかし、夢の異様さには筆者自身も気持ち悪さを感じ、結局、彼から夢の話を書きただけで、それ以上の吟味はしなかった。今から考えれば、彼の夢の世界から窺える「肉と精神の葛藤」といったものに焦点をあてて吟味した方が彼にとってプラスであったようにも思うが、当時の筆者(23 歳)には夢を扱うだけの力量がなかったので、やはり、迂闊に吟味しなかった方がよかったように思える。

その他、「鼻や耳の穴から蛇が入る夢」(D21:境界型分裂病)、「素敵な男性と同性愛の性行為をしている夢」(D22:潜伏性同性愛)など、もしもその夢を聞かされた治療者の心の中に異様な不気味さや強烈な嫌悪感が引き起こされる場合には、たとえクライアントの方から自発的にその夢を報告したとしても、そのクライアントとの面接では夢を聞くだけにとどめて、夢を積極的に吟味しない方がよいだろう。治療者自身が許容できないような夢を無理やり吟味したところで、クライアント側に何か有益なフィードバックができるとは思えないからである。「現在の私にはあなたの夢を扱うだけの力がないように思います」といった形できちんと断り、面接の焦点をクライアントの日常生活や対人関係の困難に移した方がよいように思える。

3 分裂病の場合

上の節で少し触れたが、ここで分裂病者の夢についてまとめておきたい。分裂病者の夢は分かりにくいとよく言われるが、時期や経過によって異なる。REM 期覚醒法によって分裂病新鮮例の病期と改善時の夢を正常者の夢と比較した織田(1973)の研究によれば、新鮮例の病期では夢の中の場所や体験の非現実性が正常者よりも有意に高いが、症状の改善時には非現実性が減少して正常者と差がなくなる。ただし、新鮮例ではなくて、慢性の破瓜型分裂病では、正常者に比べて夢の内容はまとまりが悪く、非現実的かつ単純で貧乏なものが多い(角南, 1969)。[筆者の経験では、慢性例でも妄想型分裂病の場合には、夢内容は非現実的ではあるものの、豊かかつストーリーもドラマ的な場合がみられる。]

一口に分裂病といっても、病院内における薬物療法・心理療法・レクリエーション療法などによって彼らが回復してくれば、彼らの自我機能は増大する。筆者の研究(1974)によれば、入院分裂病者の病識(病に対する自覚的構え)が確実になるにつれて病勢(病的異常体験の度合い)は弱まり、自我機能の働き、中でも特に現実吟味力は健全なものとなっていく。したがって、上述の織田の研究結果をも考慮すると、病気の回復期・改善期には夢分析が可能となる。

それ以外の場合には、クライアントの方から自発的に夢を話す場合はともかく、こちらから積極的に尋ねない方がよいだろう。また、仮にクライアントの方から夢を話してくれた場合でも、夢の全体的な感想をきく程度にとどめて、夢の中にあまり深入りしない方がよいだろう。夢の各構成要素についての連想がなくても、夢の内容を追うだけである程度夢の意味を推測することは可能である。なお、夢の意味が推測されたとしても、それは治療者の心の中だけにとどめておく方がよい。つまり、夢を媒介としてクライアント側の自己理解を促進するような通常の心理療法を行うのではなく、夢をクライアント理解の手がかり・状態把握の指標として活用していく訳である。

筆者が面接を行っていた30代後半のある女性クライアント(分裂病)は、ある時、病室から何冊もの日記帳を持参して、筆者に読んでほしいと述べた。それを読むと、ところどころに夢の記載があった。例えば、入院前に彼女は、「日本一のラグダに乗ってパレードして、A町に来るとテレビ局があった。見ると、テレビカメラが3台あった。(私は)グリーンのスーツを着て、行ったり来たり、挨拶をし、インタビューを受けている」という「嬉しくなるような夢」(クライアントの言葉)(D23)を見た。当時、目覚めている時の彼女は、(1)盗聴器や隠しカメラによって自分は絶えず人体実験を受けている、(2)自分は超能力を持つ日本一の天才で、いろいろな人が自分をだしにしてお金を儲けている、(3)B先生(医師)が何度も自分の留守中に住居に侵入し、自分の大事な書類を盗み出すといった妄念にとらわれていた人であるが、この夢では、他者の注目を浴びている方向に変わっている。つまり、「日本一」という点では共通しているが、他者との関係という点からすれば、「他者の食べ物にされている自分」が夢の中では、「他者の賞賛を浴びている自分」へと逆転している。これは、Freud(1900)が強調したような、夢の中での願望充足の試みでもある。入院後の彼女はまた、入院中一度も会いに来てくれない母親が夢の中に出てきて、その母親がアレコレと彼女の世話をしてくれるという夢(D24)を見ている。この夢は、母親に会いにきてほしいという彼女の願望充足の試みであるが、同時に、母親しか信頼できる人がいないという彼女の対人関係の狭さを反映するものでもあろう。筆者自身は、これらの夢を彼女との間で詳細に吟味・検討することはしなかったが、それでもこれらは、彼女の欲求を理解するのに有益であった。

XIV さまざまなタイプの夢

夢の中には各発達段階に応じた定型夢(typical dream)の他、ありとあらゆるものが出現してくるが、ここでは、夢主の死の夢、他者の死の夢、車の夢、動物の夢、橋の夢、別れ道の夢を取り上げたい。

1 夢主の死の夢

夢の中における夢主の死の形態はさまざまであるが、大別すれば、(1)誰かに殺される夢、(2)自殺する夢、(3)事故(車に轢かれる、崖から落ちるなど)や病気で死ぬ夢、(4)死に至る経緯が不明の夢、(5)その他の特殊な夢がある。最後の(5)は、例えば、『日本国現報善悪霊異記(日本霊異記)』(小泉校注、1984)の編者景戒(生没年不詳、法相宗)が延暦7年(788)3月17日に見たもので、景戒の魂神(たましい)が景戒自身の身体を薪で丁寧に焼いているという夢である。自分の魂が自分の死体を焼いているのを自分(夢主)が見ているというまことに複雑な構造であ

る。

一般的に言って夢主の死の夢は、人生における何らかの危機において見られることが多い。危機は選択と決断を迫るので、本人の主観からすれば、窮地に陥った状態になる。夢主が青年の場合には、D1, D3 で見たように、同一性の危機 (identity crisis) と関連することが多い。[大学生の場合、早川 (1989) の調査では、自分が死ぬ夢を見る大学生は、自我同一性混乱尺度 (砂田, 1979) の得点が高い。また、辻河 (1990) の調査でも、自分が死ぬ夢を見る大学生は、自我同一性尺度 (Rasmussen, 1961, 1964) の得点が低い (=同一性の混乱度が高い)。池元 (1994) の調査では、自分が死ぬ夢を見る大学生は不安度が高い。これらをまとめれば、普通の大学生の中で自分が死ぬ夢を見る人は、不安が高く同一性の拡散・混乱の度合いが高いということになる。]

死が処刑と結びついている場合、夢主の側の何らかの罪悪感と関連していることが多い。ある20代後半の男性クライアント (長期留年学生) は筆者のカウンセリングによってやっと大学に復帰したが、復帰した年 (大学8年目) の秋に、「円錐形の、先の尖った石が空から落ちてくる。恋人が私を、落ちてくる石の下に立たせようとする。私は恐くて行きたくない」という夢 (D25) を見た。この夢では夢主は、死んではいないが、処刑寸前の状態に置かれている。夢主を落ちてくる石の下に立たせようとした恋人は、夢主よりも何年も前に就職していた。この夢は、卒業論文・授業の単位・就職先といったさまざまな課題に直面していた時期にあり、その背後には、何年もの間結婚を待ち続けている恋人に対して、男としてなすべき責任をいまだ果たしていないという夢主の罪悪感が存在していた。[古典的精神分析の言い方を借りれば、この夢は処罰夢 (punishment dream)、つまり超自我の願望を充足する夢である。]

治療中のクライアントの場合、死の夢は治療上の転換期において見られる。それまで維持してきた自己態勢が治療によって変化する、その変化が「これまでの (過去の) 自分の死」というイメージとして現れてくることが多い。[自己変化が軽度の場合や自己変化への願望がある場合には、死の夢ではなく、「古い洋服を新しい洋服に仕立て直す」とか「裸で水遊びをしてさっぱりした気分になる」といった夢が多い。]

筆者自身の例から挙げれば (名島, 1995d)、86回目の個人分析の2日前、「黒い髪をしたずんぐりと肥った人が私に迫ってきて、中国の青竜刀のような刀を振りかざす。私は首をすくめ、身をかかめてかわそうとするが、彼は刀を横に大きく振り回し、私の首はあっという間に胴体から離れる」という夢 (D26) を見た。夢の中でも恐怖を感じたが、目が覚めた後も怖くて、筆者の手足はしばらくわなないていた。この切断の夢は、基本的には東洋人としての自分が自己去勢される夢であるが、分析家との関係でみた場合、彼に対するそれまでの無意識的な依存性を一挙に切り捨てる夢であった。ちなみに、分析家の両親はモンゴル系のロシア人であった。つまり、シカゴ生まれの分析家には東洋人の血が入っていた。

死の夢ではなく、実際に肉体の死に直面している人々 (臨死患者) では、死の夢は生じにくい。むしろ、恐怖や苦しさ、さみしさといった感情のこもった夢が多く、形態としては、襲われる、追いかけられる、高い所から落ちそうになる、激しく争うといったものが多い。例えば、腎臓透析を受けていたある慢性腎不全の男性 (50代) (篠塚, 1992) は数年間にわたって、「玄関の鍵を閉めようとするが、外から白粧束のおばあさんが物凄い力で押し開ける。部屋の中を逃げ回すが、おばあさんに追いかけられ、もうだめだと思ったところで目がさめる」(D27)、「後ろ姿がよく知っている人に似ていたので声をかけると、この世のものとは思えない恐ろしい顔がこちらを振り向き、びっくりする」(D28)といった夢を繰り返し見ている。特にD27は、この世とあの世の境界 (玄関) を越えて死 (白粧束のおばあさん) が侵入してくるという印象深い夢である。この男

性がこれらの夢を見た当時は、腎臓透析治療が開始されたばかりの頃で、致死率も高かったのである。また、末期癌で在宅のホスピス・ケアを受けていた72歳の男性（河野，1992）は、主治医の河野に対して淋しい声で、「若い女と男が私から抜け出して、どこかへ姿を消した。私は呼び止めようとしたんだが、黙って振り向きもしないで出ていってしまった」という夢（D29）を報告している。Hall（1977）が報告している40代半ばの女性は、病気で死ぬ直前、競馬がこれから始まろうとする夢を見ている。これは、肉体の崩壊に抵抗する精神の側の最後の努力を示すものである。

2 他者の死の夢

夢の中で他者の死を見ることは、一般的に言って、その人に対する夢主の側の敵意や競争心を表す。この場合、夢主がナイフやピストルで直接他者を殺すという夢に比べると、他者が誰かに殺される、他者が事故や病気で死ぬ、他者が死んだことを耳にするといった夢は敵意の度合いが低い。いずれにしろ、他者の死の夢が報告されたら、治療者としては、夢に出てきた他者と夢主との関係、その他者に対する夢主の感情を尋ねてみるのが大切である。

上で敵意という言葉を使ったが、クライアントによれば、敵意の中身が少し複雑になっている場合もある。例えば、ある抑うつパーソナリティの女性（50代）は、「Kさんが死体となって、他の大勢の死体と一緒に誰かに焼かれる」という夢（D30）を見た。この場合、彼女には過去において、援助を求めてきたKさん（女性）に対して冷淡に接した思い出があった。つまり、彼女は長年の間、Kさんの援助要請を拒絶したことを気に病んでいた。結局、彼女の意識面にはKさんに対する罪悪感があったが、夢の中では、彼女の罪悪感をかきたてるKさんに対する潜在的な怒りが、Kさんが誰かに焼かれるのを傍観しているという映像として表現されていた訳である。

なお、他者の死ぬ夢ではなくて実際に死んだ人の夢を見る場合、それは死者に対する夢主の側の思慕の念を表すことが多いが、中には、死者に対する罪悪感を意味することがある。例えば、夢主の不注意によって我が子を死なせてしまったとか、死者がまだ生きていた時に、その人に対してひどいことをしてしまったなど。いずれにせよ、夢に対する夢主の連想に注意を払う必要がある。

3 車の夢

夢の中に車が出てきた場合、誰が車の運転をしているのか、同乗者がいるならそれは誰なのかといったことに留意する。夢主が運転手の場合、夢主がその車をどのように統制しているか（思い通りに運転している、ブレーキがきかないなど）ということは、夢主自身のセルフコントロールの問題と関係してくる。また、車の中には動かない車もある。例えば、ある30代前半の男性クライアント（意欲喪失、空虚感、休職中）は、「運転席に座ってエンジンをかけようとしたが、エンジンがかからなかった。そこで、メーターを見たらガソリンがなかった。で、これは駄目だと思った」という夢（D31）を見た。クライアント自身はこの夢の中のガス欠ということについて「息切れ」という言葉を連想した。その後、二人でいろいろな面からこの夢を検討した結果、この夢は、(1)クライアント自身の息切れ状態（意欲の喪失）、(2)日常生活における自己吟味の甘さ（ガソリンメーターのチェックを怠った夢主）、(3)他者への依頼心の強さ（車に関して言えば、クライアントは普段、給油を父親に任せていた）という三つのものを表していた。実際のところ、彼は、ある人にうまく乗せられた形で対人関係上の厄介な揉め事に巻き込まれ、結果的に生じてきた他者への不信感や被害念慮と自ら戦った末、生への意欲が低下したのであった。

車の所属について言えば、車が夢主のものである場合、その車は夢主の自己像を表すことが多い。夢の中に車が出てきたら、車の種類（乗用車、パトカー、バス、救急車など）や様態（新車、中古、故障車、車の飾りなど）に注意する。夢の中で、新車がさびの浮き出た中古に変わったり、初めは完全な形をしていた車が途中で事故や災害（洪水や地震）によってつぶれたり変形したりすることがあるので、夢の中での車の様態の変化にも注意する。

車が夢主のものでない場合、その車に対する夢主の態度に注意する。例えば、夢主が父親の車をハンマーで打ち壊せば、それは父親に対する夢主の攻撃的・破壊的感情を意味しようし、逆に、父親の車を丁寧に磨きたてていたら、父親に対する同一化や理想化といったことが考えられよう。

夢主にとって対抗することが困難な外界や他者が、例えば「巨大なダンプカーが私の方に向かって突進してくる」といった形で映像化されることもある。[事例によって異なるが、ダンプカーが夢主にとって統御しがたい環境を示していることもあるし、夢主の心の中に内在化されている威圧的な父親像を示していることもある。]

治療を受けているクライアントの場合には、車は治療関係を表すことが多い。クライアントと治療者が一緒に一つの車に乗っている場合には、どちらが運転しているのか、車は誰のものか、車はどこに向かっていているのかといったことに注意する。同様に、治療者が見る場合には、先に述べた「パジャマで運転する夢」(D17)のように、車は自分が現在行っている治療を表す。

スーパービジョンや個人分析をうけている場合にも車の夢を見ることがある。筆者はあるケースの継続的な個人スーパービジョンの1回目を受ける日の明け方に、「スーパーバイザーの車が事故を起こす夢」(D32)を見た(鑑・名島, 1981)。夢は、「私はくつろいだ気分でスーパーバイザーの車の助手席に座っている。運転手はスーパーバイザー。車は道路を曲がって、信号待ちしている前の車に近づいていく。当然手前で停止するものと思っていたのに、車はそのままゆるゆると接近し、アレツと思う間もなくガツンとぶつかる。私は、あー、やったと思うが、そのまま動かさずボケツとしている」というものであった。筆者(当時20代)はこの個人スーパービジョンが始まる前に、このスーパーバイザー(40代の男性)から約6年間集団スーパービジョンを受けていた。この夢には、スーパーバイザーに対する筆者の依存心(助手席でのくつろいだ気分: 相手におまかせする態勢)と、スーパーバイザーに対する潜在的な不安感(事故を起こすスーパーバイザー: スーパーバイザーが本当に自分をうまく指導できるのだろうかという疑念)がよく出ている。

車の基本的機能はある地点から別の地点へと移動することである。移動は移行でもある。あるパーソナリティが別のパーソナリティへと変化する、ある対人パターンが別のパターンへと変化する、治療関係がそれまでのものとは別の関係へと変化する—このような移行期において、移動する車が夢に出現することがある。もちろん、車以外の移動物、例えば飛行機、船、汽車(電車)などが出現することもある。

4 動物の夢

夢の中には蛇、狼、犬、猫、ライオン、馬、ネズミ、蜘蛛、鳥などさまざまな動物が登場する。一般的に言って、動物は自我の中に統合されていない欲動の表象であることが少なくない。例えば、性欲動に関して言えば、Freud (1900) は、「神話や民間伝承の中で性的象徴として用いられる動物の多くは、夢の中でもこの役割を演ずる」として、魚、蝸牛、猫、鼠(陰毛のため)、蛇などを例として挙げている。

しかしながら、VIII章の中の蛇の夢のところで述べたように、動物の意味は人によって異なる

ことが多い。動物は、性欲動や攻撃欲動のみならず、夢主の自己像 (self image) にもなるし、感情や身体器官の表象にも、さらには他者や治療者にもなりうる。例えば、『蜻蛉日記』(犬養校注, 1982) の記主である藤原道綱母 (936?-995) は、天禄2年 (971) 4月末、「我はらのうちなる蛇、ありきて肝をはむ、これを治せむやうは、面に水なむ沃るべきとみる」という夢 (D33) を見た。道綱母は、藤原兼家 (929-990) の2番目の妻である。この夢の蛇(くちなわ)についての道綱母の自己解釈は何も記されていない。図式的解釈からすれば、この夢の蛇は性的欲望(川口, 1957: 李, 1993) や性的苦惱(西郷, 1972) を表すといったことも考えられるが、しかし、当時の道綱母の心理・社会的状況(家父長制的一夫多妻制の時代にあつて次から次へと女性を作る夫の兼家との愛憎関係)を考慮すると、この場合の蛇は、彼女に対して冷淡な態度を取り続ける兼家に対する怨念の凝集であると同時に、彼女を、「涙浮かばぬ時なし」の長精進(ながしょうじ)というみじめな状態に追い込んだ兼家をも表している。

ある動物が夢の中に出てきた場合、(1) 動物の動き(夢の中でどんな行動をしているか)、(2) 夢主との関係(その動物は夢主に対して親和的か敵対的か)、(3) その動物に対する夢主の感情などに注意する。これらは、夢の意味を探究するさいに重要な資料となる。例えば、ある女性の夢の中に馬が出てきた場合、「草原で乗馬を楽しんでいる」(快樂夢)という夢と、「馬に身体を食われている」(恐怖夢)という夢では意味が異なってくる。[仮に馬が夢主の兄に置き換えられるとしたら、前者では兄との心理・性的結合欲求が、後者では兄からの心理・性的な外傷体験(近親相姦を含む)といったことが考えられよう。]

5 橋の夢

橋は機能からすれば相異なる二つの世界の架け橋であり、ある世界から別の世界へと移行するさいの通り道となるものである。発達の面からすれば、橋を渡るということは、ある発達段階から別の発達段階へと移行することである。夢の中に橋が出てきた場合、橋の形状や材質はどのようなものか、夢主はどのような気持ちで橋を渡っているのか、夢主一人で渡っているのか、それとも誰かと一緒に渡っているのか、夢の中で夢主はその橋を渡りおえたのか、それとも橋を渡る途中で立ち止まったままなのか、橋の向こうにはどんな世界が待っているのかといったことに注意する必要がある。

橋を渡れないまま夢が終わってしまう場合、(1) 夢主自身の不安や迷いが夢主の足を止めてしまう場合と、(2) 夢主自身は橋を渡ろうとするものの、何らかの妨害によって橋を渡ることができない場合の二つがある。(2)の場合、例えば橋そのものが工事中で前に進めなかったり、橋を渡ろうとすると川が突然大洪水となって氾濫して橋を水びたしにするといった妨害が出現する。

6 別れ道の夢

危機と訳されている crisis という言葉はもともと別れ目とか分岐点という意味であるが、夢主が何らかの危機にある場合、道が左右に別れている所でどちらに進もうかと迷っているといった夢を見ることがある。文字通り、選択の別れ目にあつて決断できず、夢主が思い迷っている状態を反映している。

別れ道の夢は、一般的には分岐点で夢主が立ち止まっているところで夢が終了することが多いが、夢主が既に苦悩や葛藤をある程度乗り越えて、自分が進むべき方向を選択している場合には、夢主はどちらか一方を選んで進んで行く。例えば、D25を見たスチューデント・アパシーの男性は、大学の新学期が始まる直前の3月に次のような夢(D34)を筆者に報告した。それは、「どこ

かの教室に行くことになっていて、小学校の中をさまよう。いつのまにか、地下街を歩いている。大学に行かなければと焦るが、出口が見つからない。やっとエレベーターが見つかり、それに乗って地上に出る。それから雨の中を歩く。いつのまにか、国道を自転車で走っている。自転車の調子が悪くてなかなか前に進まないのを調べてみると、前輪にタイヤがついてない。前方の道は二つに別れている。どちらを選んだかはっきりしないが、結局大学へ着いたような気がする」というものであった。夢の中の二つに別れた道は、一方は大学に通じ、一方はどこか他のところへ通じている。夢の結末はあまりはっきりしないが、夢主は大学への道を選んだようである。[夢主は4月から実際に大学の授業に継続的に出席しはじめた。]なお、この夢では、夢の中で体験された感情は焦りであり、一方、象徴化された感情はタイヤのない前輪である。つまり、大学に早く行き着こうと焦っているものの、彼の心の中には大学へ行くことへのためらいもあり、それが、タイヤのない前輪に象徴化されていた訳である。

XV おわりに

夢に対する接近法にはさまざまなものがあるが、本稿では筆者なりの考えと臨床経験に基づいて、夢を治療的に活用する場合の留意点について論じた。そのさい、筆者自身が見た夢もいくつか例証として織り込んだが、大部分は、いろいろなクライアントが提供して下さった貴重な夢である。彼らからの贈り物に対して、筆者が治療者としてどれだけのものを返すことができたか、思い返してみると甚だ心もとない。

夢は、生理学的なレベルでは、Aserinsky & Kleitman (1953) が急速眼球運動 (Rapid Eye Movement) を伴う特殊な睡眠期を発見して以来、この REM 睡眠と夢との関連性について膨大な研究がなされてきた (Dement, 1955; Aserinsky & Kleitman, 1955; Dement & Kleitman, 1957; Dement & Wolpert, 1958; 福間, 1969 その他)。そして、近年では夢についてのいくつかの仮説も提出されている。例えば、活性化・合成仮説 (activation-synthesis hypothesis) (Hobson & McCarley, 1977) や感覚映像・自由連想仮説 ('sensory image'-'free-association' hypothesis) (Okuma, 1992; 大熊, 1994) などである。しかし、心理学的なレベルでは、夢の意義や夢の意味について未だよく分からないことが多々ある。今後もクライアントに教わりながら、夢の治療的活用について研究を深めていきたいものと考えている。

引用文献

- Adler, A. (1925) *The Practice and Theory of Individual Psychology*. London: Routledge and Kegan Paul, Ltd.
- Adler, A. (1932) *What life Should Mean to You*. New York: Grosset. (高尾利数訳, 1984, 人生の意味の心理学, 春秋社).
- Aserinsky, E. & Kleitman, N. (1953) Regularly occurring periods of eye motility and concomitant phenomena during sleep. *Science*, 118, 273-274.
- Aserinsky, E. & Kleitman, N. (1955) Two types of ocular motility occurring in sleep. *Journal of Applied Physiology*, 8, 1-10.
- Bonime, W. (1962) *The Clinical Use of Dreams*. New York: Basic Books. (鑪 幹八郎・一丸藤太郎・山

- 本 力訳, 夢の臨床的利用, 誠信書房, 1987)
- Cavenar, J. O., Jr. & Nash, J. L. (1976) The Dream as a signal for termination. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 24 : 2, 425-436.
- Cavenar, J. O. Jr. & Spaulding, J. G. (1978) Termination signal dreams in psychoanalytic psychotherapy. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 42 : 1, 58-62.
- Dement, W. (1955) Dream recall and eye movements during sleep in schizophrenics and normals. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 122, 263-269.
- Dement, W. & Kleitman, N. (1957) The relation of eye movements during sleep to dream activity : an objective method for the study of dreaming. *Journal of Experimental Psychology*, 53, 339-346.
- Dement, W. & Wolpert, E. A. (1958) The relation of eye movements, body motility, and external stimuli to dream content. *Journal of Experimental Psychology*, 55 : 6, 543-553.
- Erikson, E. H. (1954) The dream specimen of psychoanalysis. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 2 : 1, 5-56.
- Erikson, E. H. (1964) *Insight and Responsibility*. New York : W. W. Norton. (鑑 幹八郎訳, 1971, 洞察と責任, 誠信書房)
- Fliess, R. (1942) The metapsychology of the analyst. *Psychoanalytic Quarterly*, 11, 211-227.
- Freud, S. (1900) *The Interpretation of Dreams*. SE, 4 & 5.
- Freud, S. (1910) The future prospects of psychoanalytic therapy. SE, 11, 139-151.
- Freud, S. (1911) The handling of dream-interpretation in Psycho-Analysis. SE, 9, 143-153.
- Freud, S. (1933) *New Introductory Lectures on Psycho-Analysis*. SE, 22, 7-182.
- Freud, S. (1937) Analysis terminable and interminable. SE, 23, 216-235.
- Fromm, E. (1951) *The Forgotten Language: An Introduction to the Understanding of Dreams, Fairy Tales and Myths*. New York : Grove Press.
- 福岡悦夫 (1969) REM 期覚醒法による夢の研究 夢の精神生理学的研究 (第 I 報) *精神神経学雑誌*, 71, 960-979.
- Hall, C. S. (1947) Diagnosing personality by the analysis of dreams. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 42, 68-79.
- Hall, J. A. (1977) *Clinical Uses of Dreams: Jungian Interpretations and Enactments*. New York : Grune & Stratton.
- 早川久美 (1989) 大学生の夢内容の研究—同一性混乱との関連性の検討— 昭和 63 年度熊本大学教育学部心理学科卒業論文
- Heimann, P. (1950) On counter-transference. *International Journal of Psycho-Analysis*, 31, 81-84.
- Hobson, J. A. & McCarley, R. W. (1977) The brain as a dream generator : An activation-synthesis hypothesis of the dream process. *American Journal of Psychiatry*, 134, 1335-1348.
- 池元宏光 (1994) 大学生における夢と不安度との関連性 平成 5 年度熊本大学教育学部心理学科卒業論文
犬養 廉 (校注) (1982) *蜻蛉日記* 新潮社
- Jung, C. G. (1917) *On the Psychology of the Unconscious*. CW, 7, 1-119.
- Jung, C. G. (1937) The realities of practical psychotherapy. CW, 16, 327-338.
- Jung, C. G. (1948) *General aspects of dream psychology*. CW, 8, 237-280.
- Jung, C. G. (1963) *Memories, Dreams, Reflections*. New York : Pantheon Books.
- Jung, C. G. (1968) *Analytical Psychology : Notes of the Seminar given in 1925 by C. G. Jung*. Princeton : Princeton University Press.
- 川口久雄 (1957) *かげろふ日記補注* (鈴木知太郎・川口久雄・遠藤嘉基・西下經一校注, 土佐日記・かげろふ日記・和泉式部日記・更級日記, 岩波書店, 338-350)
- 河野博臣 (1992) *死を迎えるとき 終末期医療の現場から* 朝日新聞社
- 河合隼雄 (1976) *影の現象学* 思索社
- 河合隼雄 (1987) *明恵 夢を生きる* 京都松柏社
- 河合隼雄 (1988a) *夢の中のクライアント像 (I)* (山中康裕・斉藤久美子編, 臨床的知の探究 上, 創元社, 3-19)
- 河合隼雄 (1988b) *夢の中のクライアント像 (II)* (山中康裕・斉藤久美子編, 臨床的知の探究 下, 創元社, 3-20)

- Kernberg, O. (1974) Further contributions to the treatment of narcissistic personalities. *International Journal of Psychoanalysis*, 55, 215-240.
- 木村紀子 (1987) 古代社会の声わざ人たち—夢語り・誦歌・猿学をめぐって— 國語國文, 56:5, 22-41.
- 小泉 道 (校注) (1984) 日本靈異記 新潮社
- 久保加代子 (1991) 夢解釈における中核葛藤テーマ法の活用—事例研究— 平成2年度熊本大学教育学部心理学科卒業論文
- 栗崎幾子 (1995) 電波に悩み続けるクライアントとの面接経過 九州臨床心理学会第23回大会発表論文集, 60-61.
- Luborsky, L. (1984) *Principles of Psychoanalytic Psychotherapy: A Manual for Supportive-Expressive Treatment*. New York: Basic Books. (竹友安彦監訳, 1990, 精神分析的治療法の原則, 支持—表出マニュアル, 岩崎学術出版社)
- McGuire, W. (ed.) (1974) *The Freud/Jung Letters*. London: Hogarth Press.
- 箕輪かほる (1994) 夢内容に及ぼす外部刺激の影響 平成5年度熊本大学教育学部心理学科卒業論文
- Myers, W. A. (1987) Work on countertransference facilitated by self-analysis of the analyst's dreams. In A. Rothstein (ed.), *The Interpretations of Dreams in Clinical Work*. New York: International Universities Press. 37-46.
- 名島潤慈 (1974) 分裂病者における自我機能と自己概念に関する一研究 昭和48年度広島大学大学院教育学研究科修士論文抄, 118-121.
- 名島潤慈 (1977) 精神分析的治療法における治療者側の逆転移の問題 広島大学教育学部紀要, 第1部, 第26号, 327-337.
- 名島潤慈 (1978) 逆転移の吟味過程における夢の意義—ある自殺未遂者(自己愛的人格)との心理療法中に治療者が見た夢を通して— 広島大学教育学部紀要, 第1部, 第28号, 149-160.
- 名島潤慈 (1979) 逆転移の力動性 逆転移性の憎しみについて 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 第28号, 265-270.
- 名島潤慈 (1980a) ある自殺未遂者の心理療法—樹里子の症例— (上里一郎編, シンポジウム青年期2自殺行動の心理と指導, ナカニシヤ出版, 196-223)
- 名島潤慈 (1980b) フロイトと逆転移 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 第29号, 297-303.
- 名島潤慈 (1980c) 逆転移考—逆転移の治療的活用の可能性について— 中国四国心理学会論文集, 13, 94.
- 名島潤慈 (1981) 「ドラ症例」におけるフロイトの逆転移 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 第30号, 297-304.
- 名島潤慈 (1982a) インテーク面接における夢の臨床的意義について 登校拒否の1症例 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 第31号, 241-249.
- 名島潤慈 (1982b) 絵画療法 (上里一郎編, 改定版 乳幼児臨床心理学, 福村出版, 102-115)
- 名島潤慈 (1989) 夢の中の死 青年期の同一性危機事例の検討 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 第38号, 251-256.
- 名島潤慈 (1990) フロイトの夢解釈についての検討 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 第39号, 271-283.
- 名島潤慈 (1991) ユングとフロイトにおける夢解釈の比較検討 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 第40号, 325-336.
- 名島潤慈 (1992) 親鸞の夢—「三夢記」(建長2年文書)の検討 第3回九州臨床心理学会熊本地区大会発表資料
- 名島潤慈 (1993a) 日本における夢研究の展望 歴史と研究領域の概観 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 第42号, 283-324.
- 名島潤慈 (1993b) 親鸞の夢—六角堂の夢告の検討— 日本心理臨床学会第12回大会発表論文集, 320-321.
- 名島潤慈 (1993c) Psychotherapy with a young man who is very quiet, introverted and taciturn. 広島・White 精神分析セミナー発表資料
- 名島潤慈 (1994) 日本における夢研究の展望補遺 (I) 古代から近世における夢の言葉 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 第43号, 267-289.
- 名島潤慈 (1995a) 日本における夢研究の展望補遺 (II) 古代におけるイメ(夢)の問題 熊本大学教育

- 実践研究, 第12号, 63-72.
- 名島潤慈 (1995b) 治療概念としての「能動性」の吟味 九州臨床心理学会第23回大会発表論文集, 76-77.
- 名島潤慈 (1995c) 能動夢と受動夢 日本心理学会第59回大会発表論文集, 221.
- 名島潤慈 (1995d) アメリカにおける夢分析の経験 精神分析研究, 39:5 (印刷中)
- 名島潤慈 (1995e) 法然の夢—二祖対面の夢の検討— 日本心理臨床学会第14回大会発表論文集, 296-297.
- 名島潤慈 (1996) 親鸞の夢 康元2年夢告和讃の検討 心理臨床学研究 (投稿中)
- 中井久夫 (1974) 精神分裂病状態からの寛解過程—描画を併用せる精神療法をとおしてみた縦断的観察— (宮本忠雄編, 分裂病の精神病理2, 東京大学出版会, 157-217)
- 織田尚生 (1973) REM期覚醒法による精神分裂病者の夢に関する研究 精神神経学雑誌, 75, 1037-1060.
- 大熊輝夫 (1977) 睡眠の臨床 医学書院
- Okuma, T. (1992) On the psychophysiology of dreaming: A 'sensory image'-'free-association' hypothesis of the dream process. Japanese Journal of Psychiatry and Neurology, 46, 7-22.
- 大熊輝雄 (1994) 夢の生理学 (日本睡眠学会編, 睡眠学ハンドブック, 朝倉書店, 66-71)
- Racker, H. (1968) Transference and Countertransference. London: Hogarth Press.
- Rasmussen, J. E. (1961) An experimental approach to the concept of ego identity as related to character disorder. Dissertation Abstracts International, 22 (5-A), 1911-1912.
- Rasmussen, J. E. (1964) The relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. Psychological Reports, 15, 815-825.
- 李 恵燕 (1993) 古典文学における夢について 學術論叢, 第1集, 65-78.
- 西郷信綱 (1972) 古代人と夢 平凡社
- 清水敦彦 (1983) 大学生の夢内容とアイデンティティ 昭和57年度熊本大学教育学部心理学科卒業論文
- 篠塚未央 (1992) Personal communication.
- 砂田良一 (1979) 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究, 27:3, 65-70.
- 角南 讓 (1969) 慢性分裂病者の精神生理学的研究—精神病者の夢の研究 (第1報)— 精神神経学雑誌, 71, 980-997.
- 鑓 幹八郎 (1973) 夢, 神話等における蛇のイメージ—情動表現の臨床心理学的考察— 広島大学教育学部紀要, 第1部, 第22号, 267-282.
- 鑓 幹八郎 (1976) 夢分析入門 創元社
- 鑓 幹八郎 (1984) 夢解釈の技法とその発展 精神分析研究, 28:2, 13-19.
- 鑓 幹八郎・名島潤慈 (1981) スーパービジョン—分析治療の臨床教育・援助— (前田重治・小川捷之編, 精神分析を学ぶ, 有斐閣, 293-313).
- Tauber, E. S. (1954) Exploring the therapeutic use of countertransference data. Psychiatry, 17:4, 331-336.
- Tower, L. E. (1956) Countertransference. Journal of the American Psychoanalytic Association, 14, 224-255.
- 辻河昌登 (1990) 大学生の夢主題に関する調査研究 中国四国心理学会論文集, 23, 80.
- 角田和一 (1957) 盲人の夢と幻覚 東北大学教育学部研究年報, 5, 82-105.
- 渡辺純子 (1983) Personal communication.
- Watson, R. I. (1994) The clinical use of the analyst's dreams of the patient. Contemporary Psychoanalysis, 30:3, 510-521.
- Weigert, E. (1952) Contribution to the problem of terminating psychoanalyses. Psychoanalytic Quarterly, 21, 465-480.
- Whitman, R. M., Kramer, M. & Baldrige, B. J. (1969) Dreams about the patient: An approach to the problem of countertransference. Journal of the American Psychoanalytic Association, 17, 702-727.
- 安永 浩 (1978) 精神医学の方法論 (懸田克躬編集代表, 現代精神医学大系1c, 精神医学総論III, 中山書店, 3-45).
- 吉野裕子 (1979) 蛇 日本の蛇信仰 法政大学出版局